

# サンコール EV用電流センサー部品 北米向け11月量産開始

サンコール(本社=京都市、大谷忠雄社長)は、EV(電気自動車)向けに需要が拡大している電流センサー向け部品「シャントバスバー」を、今年11月から北米向けに量産供給を開始する。2023年度には年間13万台の供給規模となる見通しで、車載用電流センサー事業を新規事業の柱の一つとして育成強化を図る。

## 23年度供給規模13万台へ

自動車電動化の流れに伴い、電流の監視や異常検出、コントロー

ルを行うシャントセンサーの需要が増加している。同社では独自の

材料塑性加工技術を生かしたフォーミング方式を採用し、数年前か

ら電動フォークリフトやHVトラック、自動搬送装置(AGV)、太陽光発電装置など各種用途向けに部材や製品を順次量産対応してきた。

従来、バスバー(大容量の電流を流す導体部品)の電流検出には非接触型のホールセンサーを取り付けて行っていたが、組立工数や部品点数、取り付けスペースの確保など課題があった。同社ではバスバーに、抵抗値の極めて小さいシャント(抵抗器)機能を付加

したシャントバスバーを開発し、それまでの締結部発熱とそれによる電力損失のデメリット解決に加え、低コスト、高精度、フレキシブル設計なども可能となった。  
昨年からEVメーカーと実装テストを進め、今回本格採用が決定した。用途先としてはEV車載用のほか、産業機器のインバーターやコンデンサー、スマートメーター、家庭用蓄電池などさまざまな分野への採用が期待できる。同社では「まずはEV向けの採用拡大を進め、将来的には幅広い需要獲得につなげていきたい」と(大谷社長)考え。